

平成21年度能美市地域福祉活動計画  
第2回アクションプラン推進協議会及び第2回評価委員会

日時：平成21年7月24日（金）午後7時30分～

場所：辰口健康福祉センター

出席者：高塚亮三（福祉施設等） 西川方敏（市ボランティア連絡協議会） 井上徹（市民生委員児童委員協議会） 澤田時弘（市町会長連合会） 宮田明（市自治公民館協議会） 喜多泉（子育てに関わる団体） 近藤沙夜里（一般公募） 田中邦一（学識経験者）

[欠席者：南昭憲（市自治公民館協議会） 荒井昌宏（学識経験者）]

事務局：宮本会長、宮田事務局長、新川、海道、南野、谷

1. 開会の挨拶

西川副委員長

2. 各 AP 委員会からの報告

私たちのボランティアセンターづくり委員会・・・資料1

西川：資料のP1～4は、ボランティアセンターのポスターをどこに、どれくらい、配布したらいいか、委員会で協議し最終的に決定したことを一覧表にしたもの。ポスターA1サイズを36枚、A2サイズを206枚をそれぞれ、配布することになった。

P6には、ボランティアセンターのホームページアドレスを取得したことが書いてあるが、ポスターにもそのアドレスを掲載してある。

P5は、ボランティア・コミュニティ活動支援センター運営委員会の委員選出についてで、AP委員会であるボランティアセンターづくり委員会委員とセンターの運営委員会委員との関係性をどうするかということをも第1回に引き続き、前回の第2回の委員会でも協議したが、結論を出すまでに至らず、もう少し検討していくことになった。

支えあいのしくみづくり委員会では、ファミリーサポートセンターを軸に活動しているが、ボランティアセンターづくり委員会とボランティアセンター運営委員会との関係と似ているのではないかとということで、次回のAP委員会は、支えあいのしくみづくり委員会との合同開催として、お互いの意見を参考にしながら協議することを予定している。

支えあいのしくみづくり委員会・・・資料2

喜多：7月10日に委員会を開催した。前年度に引き続いて、ファミリー・サポート（以下「ファミサポ」）というしくみがあること、なぜそういうしくみできたのか、本当の目的は何なのか、ということを理解してもらえるようにいろいろな場所に顔を出して、直に伝えていこう、とにかく動いて伝えていくことが大事であると話し合い、6月から動き出した。

保育園では、講演会後に時間をもらったりしたが、45分間もらってじっく

り話せるところもあった。お父さん・お母さんたちと間近に話すと、まだ、「ファミサポ」を知らない方が多く、「誰でも利用できるのか？」と言われ、知らせることができて良かった。なぜ、「ファミサポ」が立ち上がって来たのか、どんなふうに子育て環境が変わって来ているのか、これからどんな方向を目指して行けばいいのかなど話をした。

7月からは、小学校、中学校にも足を運び、学校の先生方に話を聞いてもらおうと思い、まず、校長先生に事前をお願いしてまわった。先生方にも「ファミサポ」を周知して、利用できることで、心の負担を軽くしてもらったり、生徒の両親にも周知してもらうことをお願いした。

資料2にあるファミサポ通信には、協力会員と依頼会員の声を掲載している。「ファミサポ」を利用するお母さん方には、支えられるだけでなく、協力会員とつながるという関係をつくることで、良い刺激を受けられることが一番だと思う。

今後は、商工会青年部や寺井の女性会にも説明にお邪魔する予定。また、昨年度、好評だった「ファミサポ」のしくみを説明する寸劇を練習して、いつでも使えるようにしていくことになった。

#### ネットワークづくり委員会・・・資料3

井上：7月9日に重点地区地域福祉委員会連絡会を開催した。昨年度は、「モデル地区地域福祉委員会」と言っていたが、今年度は、「重点地区地域福祉委員会」ということになった。

重点地区となった6ヶ所の町(内)会が、それぞれに分かれて話し合い、今後の地域福祉委員会の取り組みについて発表した。このとりまとめは、後日、事務局より出されることになっている。

地域福祉委員会というと、何か、新しいことを取り組むイメージをされがちだが、町(内)会が、従来から取り組んでいく行事だったり、各種団体の活動を充実させたりということ、まず、この取り組みを応援するという、イメージが大事だと思う。

#### 人づくり委員会・・・資料4

高塚：6月15日に第2回目の委員会を開催し、その中で今年度、特に取り組んでいくこととして、認知症サポーター養成講座を取り上げた。

この講座は、昨年度までは、市の介護長寿課が中心となって進めていて、以前からの継続的な活動である。講座の講師は、講習を受けたキャラバンメイトという方が、務めることになっていて、今年度は、能美市内のキャラバンメイトを中心に、認知症「サポーター養成講座」の内容についての「作業班」をつくったところで、これと、人づくり委員会とが連携していくことになる。国の目標としては、100万人の認知症サポーターを養成するという目標で3年前から取り組んでいる事業で、今年の5月に100万人を達成した。100万人という数字は、人口の1%にあたり、能美市での1%は、500人である。能美市の国への報告は、500人余としたが、実際には、1,1

00人位にはなっている。

目標の100万人を達成し、国は、この講座を今後、どうしていくのが、注目される場所だが、能美市としては、どうしていくか、これまでの延長線でやっていけばいいのかなど、そんなことを考えることを含めて、人づくり委員会の委員が、1度、認知症サポーター講座を受けてみようということになった。

講座の受講者に対し、前後にアンケートをとって、講座を受けたことによって、どういう理解がなされるか、またどういことが、講座に要求されるのかということを検討する資料を得るために、7月17日に、人づくり委員会として認知症サポーター養成講座を受けた。委員だけでなく、委員の選出母体の方にも声掛けして、合計30名程の参加となり、いろいろな意見をもらっており、現在、そのとりまとめをしているところである。

この資料を参考にして、こんな人たちには、どんな話をすればいいのか、ただ、単に通り一辺倒ではなしに、老人クラブなら老人クラブ向けの認知症サポーター養成講座でという形で行うなど、少し、講座の内容を精査して、認知症の正しい理解や認知症になった場合、あるいは介護をする場合など、それぞれの立場から、その支えとなるような講座にしていきたい、ということを進めている。

西川：以上、AP委員会から報告してもらったが、質問・意見等がありますか。

では、まず、私から、補足ということで1点ですが、重点地区地域福祉委員会で、資料3の名簿に「緑が丘10町会」と書かれているが、これは、「緑が丘第10町内会」のことである。備考欄に「新規」とあるが、昨年度は、緑が丘町会としてモデル地区だったのが、今年度は、緑が丘の中にある、全部で10町内会あるうちの1つである、第10町内会が重点地区となった。緑が丘は、町会として地域福祉委員会があり、その中の10町内会には、それぞれに「地区福祉委員会」がある。

また、感想として、人づくり委員会の認知症サポーター養成講座の中で受講前後にアンケートをとるという効果測定があった。ボランティアセンターづくり委員会でもポスターやホームページによって、どのような効果があったかを測定することを考慮に入れたいと思った。

また、意見として、ボランティアセンターづくり委員会に、支えあいのしくみづくり委員会の方に参加してもらうことをお願いしたが、逆に、ボランティアセンターづくり委員会を他の委員会に呼んでもらいたいと思う。例えば、ホームページ、情報システムの活用をどう捉えているか、いきいきサロンボランティア連絡会が、立ち上がっているが、実際に横の連絡会ばかり増えていくと負担になる方も出てくるが、ホームページをつかった意見交換とか、それを一般の方が閲覧することなく、内輪のメンバーだけで情報交換できるように使えないとか、いろいろ工夫していけると思う。そんなことを含めて、他の委員会との意見交換を考えていきたい。

宮田：「ファミサポ」の説明の話で、保育園までが、利用できる対象なのかと聞いていた。なぜ、小学校、中学校まで、説明を広げているのか。

喜多：「ファミサポ」のことを市民のみなさん全てに知ってもらわなければいけない。「ファミサポ」のことを非難する市民が、いてはいけないということがある。「ファミサポ」は、小学6年生までの子どもを持つ親が利用できるわけだが、中学校に説明に行くのは、中学校の先生には、クラブ活動の指導などで、土・日でも、自分の子どもをみれない方がたくさんいるからだ。先生方が、まず元気でなければ、生徒も元気になれないということで、先生方にも「ファミサポ」を知ってもらい、もっと利用して欲しいということ。もう1つ、先生方が、日々、生徒を見ていて、何かおかしいと気づいた時には、その生徒の家庭や親にも何かおかしいということがあるわけで、そんな時には、「ファミサポ」を利用できることを、先生方からも親に伝えてもらいたいというためでもある。

「ファミサポ」のことは、小さい子どもを持つ親だけが知っていればいいわけではない。なぜ、支えあいが必要なのかということをも市民のみなさんに知ってもらわなければならない。「ファミサポ」を非難する方は、少なくとも、「そんなものをつくるから、親を甘やかしダメにするんや」と言う方がいるが、決してそうではない。力不足な親が、「ファミサポ」を利用し協力会員と接して、何か、気づきがあったり、知らない方とうまく接することができない、そんな場合、「ファミサポ」の利用が地域と接するためのきっかけとなっているとか、そういう「ファミサポ」の意義を理解して欲しい。利用の仕方だけを知っているのは、困るのです。なぜ、「ファミサポ」が、立ち上がって、なぜ、支えあいが必要なのかを理解してもらうために、いろいろなところに足を運んで、「ファミサポ」を説明している。

宮田：もっと人の集まるようなところに足を運ぶとか、もう少し、広角的なPRも考えてはどうか。

喜多：私たちが、小さい集まりをまわるのは、例えば、100人が集まる中で、壇上から話しても僅かな人にしか伝わらない、しかし、参加者全員の顔が見える少人数の中で、一生懸命に話すと真意が伝わりやすいからである。また、質問の声も出やすい。顔と顔を突き合わせて話すことが、一番、確実に伝わるので、そこから、少しずつ、広がっていけばいいと考えている。

澤田：重点地区地域福祉委員会のことだが、根上、寺井、辰口と地区に2ヶ所ずつに指定があれば良いと思っていたが、やはり、町内会長も役割が多く、何かと忙しいことから、積極的に受けられないのだと思う。

田中：私もバランス的に寺井地区が、「1つ」というのが気になったが、重点地区になると新たなことをしなくてははいけない、それが重荷だという話が出てい

た。そうすると、いろいろな役割を兼ねている町会は、なかなか難しいということで、寺井地区の方は、積極的になれなかったのだと思う。

泉台町では、従来からの「見守り会」を発展的に解消して、そこに地域福祉委員会を立ち上げたので、活動内容は、見守り会の活動に加えて、健康づくりや福祉の視点を入れての町会行事に取り組んでいる。

こう考えると、従来からの町会の活動すべてが、地域福祉委員会になるのではないかと思う。だとすると、改めて、重点地区になっても果たしてどうなるのか、そこが、見え難いこともあったのではないかと思う。

高塚：地域福祉委員会の活動は、町内会、公民館でやって来た活動そのものだと、思うが、少し、考え方が違うのは、どうしても、いろいろな網の目から漏れる人たちがいて、この人たちを何とか、支えていかなければいけない。常にそこには、誰かの目が向けられているかどうかということが、一番、大切だということ。

ただ、そういう人たちは、声を掛けても、町会などの行事には参加せず、地域の中に溶け込めない人たちなので、無理矢理に参加する、しないということではなしに、さりげなく、支えていって、制度の隙間からもれる人たちが、いないようにしていくのが、地域福祉委員会の活動ではないかと思う。

西川：また、緑が丘の例を出すと、緑が丘地域福祉委員会では、地域福祉の考え方を説明する時に、各地区福祉委員会の班長が、集まって2回に分けて説明会を開いた。

1回目の説明会では、各班長に対し、見守りが必要な方を挙げるようお願いしたが、いきなり、それは無理であると反発があった。逆に、「地域福祉の主旨を説明したものを全戸配布して欲しい」と要望があった。

2回目の時は、見守りが、必要な方には自ら手を上げてもらおうという意見があり、今日、その主旨と見守りが必要な人には名前を書いて欲しいという内容のものが全戸配布として入っていた。支援をする・される側が、うまく、噛み合うように地域福祉委員会で話し合えたことが一歩、前進したと思う。また、行政の方は、福祉見守り安心マップで、一定の条件の要援護者を拾い出しているが、そこから、漏れる人たちを地域福祉委員会で支援するという2本立てにもなっている。

結局、重点地区となって、「成功・失敗」というよりも、その町会が、「どういう取り組みをして、その結果がどうだったか」ということを報告し、それを他の町会が参考にすれば良いと思う。各町会は、それぞれ、特色が違うし、ある町会がうまくいっても、他ではうまくいかないこともある。

### 3. 新規 AP について

いきいきサロンボランティア連絡会・・・資料5

事務局：この連絡会の立ち上げは、ネットワークづくり委員会の中の AP のうちの重点項目になっている。5月に各地区から、いきいきサロンボランティ

アとして活動する方を3名ずつを選び、計9名で連絡会が立ち上がった。この連絡会は、地域福祉委員会に大いに関係があり、各地区で取り組まれているいきいきサロンについて、情報交換をしながら「誰もが運営しやすく、活動しやすい、参加しやすい、いきいきサロンの活動のための手引書をつくる」ということ、NWづくり委員会と連携していきながら、そのタキ案をつくるということが、目的になっている。

#### 4. 第2回地域福祉フォーラム(案)について

事務局：資料6で(案)を説明。

西川：一週間という中で、連日、どこかで何かを開催しているので、参加できる日に参加するという意味で参加しやすい。

喜多：楽しみである。参加者が、たくさんあればよいことではなく、少人数の中で話し合い、「本当に気持ちの中で理解できた」「それなら協力していこう」と思ってくれる人を、1人でも2人でも増やすということが、ねらいだと思う。ただ、「1週間、やっている」という周知をきちんとしていかないとまったくないので、PRが大事になってくると思う。

高塚：これは、各AP委員会やいきいきサロン連絡会、AP推進協議会などが責任を持って、1コマを企画・運営するのか、それとも実行委員を募る実行委員会形式で全体的に運営していくのか、どちらか。

事務局：各AP委員会などが、責任を持って、1コマを企画・運営するという(案)である。

高塚：この(案)では、最終日が、AP推進協議会の担当になっているが、評価委員会の評価は、また、別にするということが。

事務局：そうです。

高塚：この(案)で進めていくと、会場や食事形式などいろいろと企画もあるので、各AP委員会に持ち帰り、早々に協議していかないといけない。

西川：私は、この(案)は、優れた企画だと思う。昨年度は、社会福祉大会と地域福祉フォーラムの2つがあって、同じ形式で開催したので、それとまったく違う形で、1週間通してできるだけ多くの方に来てもらいたいという思いが、表れている。AP委員会としては、1コマ、与えられて、そこで、参加者とじっくり話し合えて、反応を直に受け取ることができる。

喜多：「こうでなければならない」ということを取っ払って、各AP委員会が、ア

アイデアや色を出して1コマを受け持つと、各委員会の目指すところをアピールできるし、参加する方はイメージしやすい。ただ、それぞれの適当な広さの会場を押さえるなど、調整が、大変だと思う。

西川：会場を辰口、寺井、根上の3地区にどう振り分けるなど、少し頭をひねらなければならない。そうすると、各委員会のテーマ・方向性などを9～10月を目処に決めて、会場を押さえる必要があるのではないかと。

事務局：この(案)を1度、各AP委員会に持ち帰り、協議し、それぞれが意見をとりまとめし、次回のAP推進協議会に持ち寄ることにしたらどうか。

高塚：押さえておくことは、「ただ単に楽しければいい」ということではなく、「2年目の締めくくりは何を目指すのかということを確認する必要がある」ということである。楽しそうではあるが、具体化していくと難しいような気がする。参加人数を限ってしまうのか、来た方をすべて受け入れるのか、などいろいろと協議しなければならない。

では、まず、各AP委員会に持ち帰り、協議をし、次回のこの会で結果を報告することにしたい。

## 5. 今後の予定

次回開催日：9月29日(火)午後7時30分～

場所：辰口健康福祉センター

内容： 報告(各AP委員会から)

情報交換

協議(地域福祉フォーラムについて)

その他

その他、能美市民ボランティアフェスティバル(8/9 根上総合文化会館)の開催、参加のお知らせ

## 6. 閉会の挨拶

高塚委員長：今日は、AP委員会が、より魅力のあるものに、また活動が、地域の隅々まで行き渡るようにと、各委員会が、それぞれ考えて活動されている報告があった。各委員会のAPが、重なり合う部分もあるので、お互いに声を掛け合って、合同での開催として、意見交換をすることも意義があることなので、委員会の枠を越えて話し合っていければと思う。おつかれさまでした。

文中の「AP」とは、「アクションプラン」のことを指す。